

専光寺付近遺跡ミニ展示

2021年6月25日

はじめに

専光寺付近遺跡は、仙石土地区画整理事業にともない、昭和62年8月から平成3年3月まで発掘調査が行われました。現在、発掘調査で得た記録を整理し報告書を作成しています。今回は、その経過報告の一環として今から約1500年前の古墳時代(3世紀末～7世紀)の住居跡から出土した土器を紹介します。

土器の種類

かめ
甕 カマドに掛けて煮たり、お湯を沸かします。直接火を受けていた痕跡がみられます。

こがたかめ
小形甕 甕と同じく直接火を受けており、カマド前の熾火おきびを利用して調理をしていました。

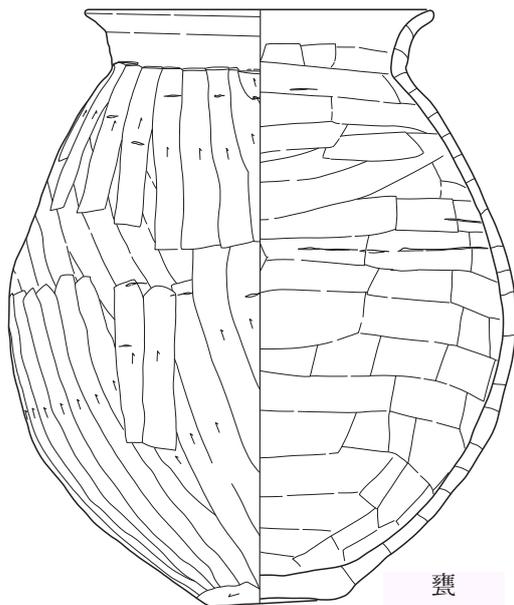
こしき
甗(蒸し器) 底はなく、ここに布などを当てて使います。湯を沸かした甕の上ののせて、蒸気を利用して食べ物を蒸します。

ほち
鉢 外側が火を受けています。炒める用途に使っていたのでしょうか。

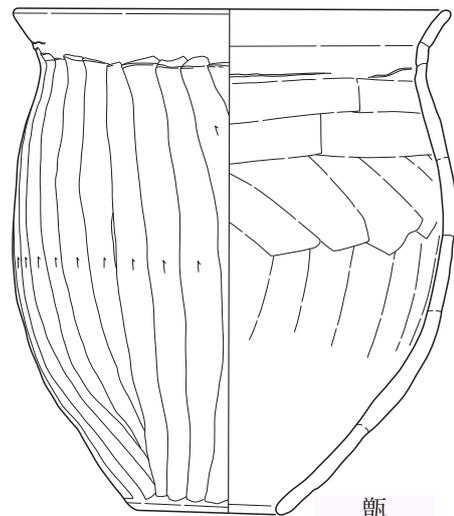
つき
坏(皿) 手にもって使っていた食器。大皿はなく、個別に盛り付けしていたのだと思われます。

たかつき
高坏 祭祀に使う土器。皿の部分が摩耗していることが多いです。

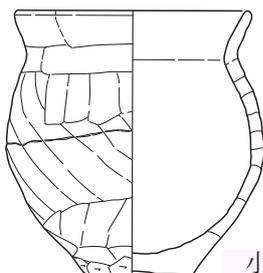
かん
罎 小形の壺つぼ。少量の貯蔵用。



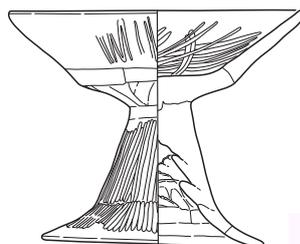
甕



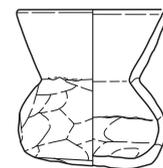
甗



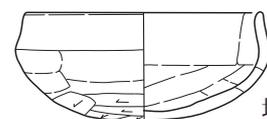
小形甕



高坏



罎



坏

土器の移り変わり

土器の年代は、考古学の研究結果から、形や大きさ、製作技法の違いで知ることができます。ここでは、5世紀後半、6世紀前半、6世紀後半と3時期の土器を並べています。

注目点

★形が変わっていく

甕は胴部の張りがなくなり、長くなっています。カマドに合わせて甕も変化していったと考えられます。

高坏は脚が短く小形化し、坏の形も変わっていきます。

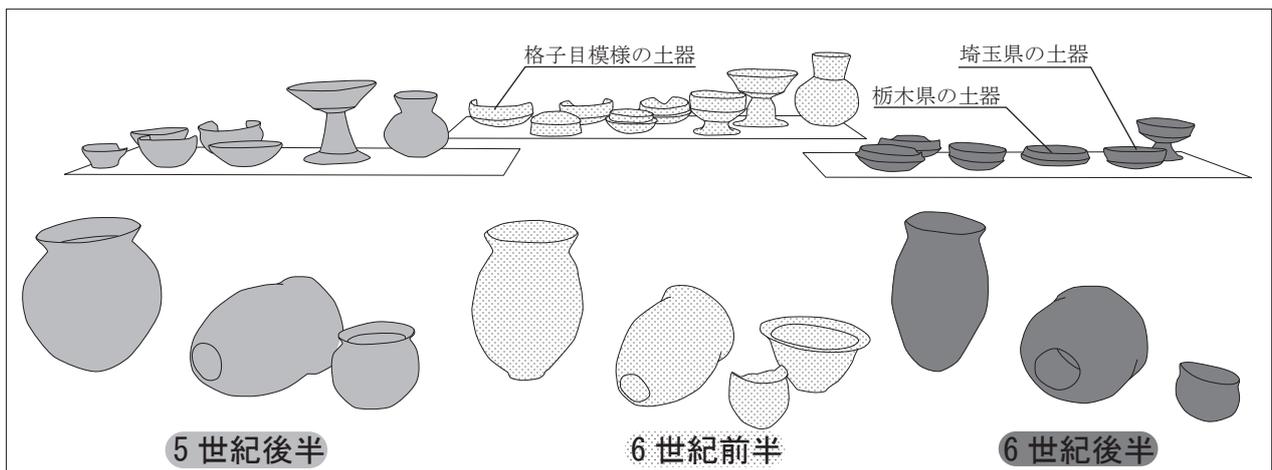
★須恵器模倣坏

6世紀前半に須恵器を真似した模倣坏もほうつきが現れます。関東地方で広く流行しました。坏も蓋も細部まで忠実に再現しているのがわかります。

しかし須恵器の蓋を模倣したものは、蓋ではなく坏ひら(皿)として使われていました。高坏の坏部分も蓋を真似たものが載っています。須恵器は集落から出土の少ない貴重な土器です。使い方を知らない人が作って、広まっていったのでしょうか。

★種類の変化

5世紀後半では坏にたくさんの種類が見られます。ところが模倣坏が出てきた6世紀前半以降はこればかり作られるようになります。

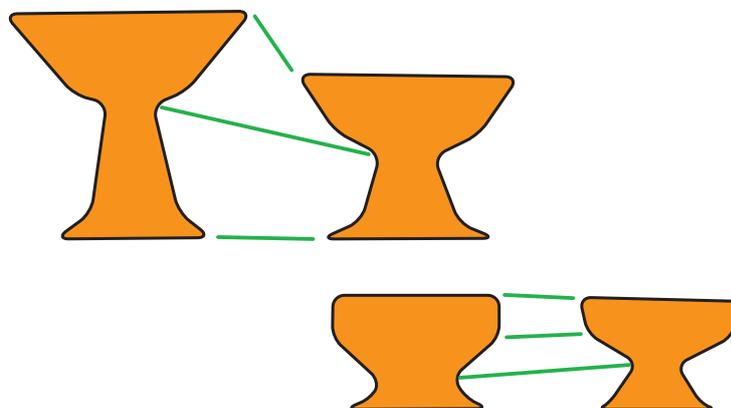


高坏の変化

5世紀後半

6世紀前半

6世紀後半



★実際の土器と見比べてみてください。